

---

# 仕切りの向こう

秋名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕切りの向こう

### 【Nコード】

N6016B

### 【作者名】

秋名

### 【あらすじ】

主人公の男は大学の友達多数と共に飲み会のため深夜遅くまで営業している居酒屋に来ていた。

あれは飲み会の時だった。

最初のうちは男は男で盛り上がって、女は女で盛り上がっていた。途中から酔いが回り始めたのか、だんだんと男女がごちゃ混ぜになってきた。

「ねえ？あのさああたしの彼氏ってさあ・・・」

「いやあゝあの時は俺は参ったね！だってさあ・・・」

「はあゝ前にね・・・」

などと各自がグループを作って話している。

もともとこの飲み会に乗り気じゃなかった俺は、その中にあること自体がつまらなくなってきた。

一人で席を立ち、トイレに向かうフリをしてその場を一時的に離れた。

俺は仕切りで分けられた隣の席に移った。

遅くまで営業している居酒屋で、終電の時間も過ぎていたために、店内には俺達と、もう2組しかいなかった。

「なにが楽しいんだろうなあ・・・」

一人になるとやたらと余計なことまで考えてしまう。

「ん？何してるの？」

そこにいたのは、今日一緒に来たメンバーのうちの一人で、俺が「

彼女なんか・・・」と思い始める前に好きだった子だった。  
もう好きとかそうゆう感情はあまりなかった。  
靴を脱ぐ場所に座りながら、からだだけをこっちに向けていた。

「何って・・・むこうに居づらかったからこっち来たんだよ」

「えゝ！ウチと一緒にじゃゝん！」

「えっ？」

「なんか知らない人の話とか聞いててもつままないじゃん」

「お、俺もそうだったんだよ！お前と気が合うなんて思ってたよ」

「なにそれゝ！酷くなゝい！？」

隣に座った彼女は、少し酔いが回っていて、頬も少し赤かった。  
化粧のせいかもしれないけど・・・

「うゝん」

彼女はグラスを両手でガッチリと押さえながらうなっていた。

「ん？なした？」

自分のグラスを口に近づけたときに聞かれた。

「あのねゝなんか彼氏が出来ないんだよねゝ」

「え？お前って彼氏いたんじゃないのか？」

「え〜？アハハ。いるわけないじゃん！もしかしていると思ってたの？」

「う、うん。だってそれなりにカワイイから彼氏の1人や2人ぐらい・・・」

「マジかあ〜！ウチってそんな風に見られてたんだあ〜」

「ずっといると思ってたよ」

「アハハハハ！お、うわあ・・・」

彼女は座ったままバランスを崩して後ろに倒れそうになった。壁に頭をぶつけそうになった彼女を支えようとした。

彼女の首の後ろに手を回して、壁と頭の間で自分の手を滑り込ませた。

ゴンッ

「いてっ」

「あ・・・大丈夫？」

支えようとしたけど力が入らなくて、彼女の上になって顔を覗き込むような体勢になった。

「・・・」

「・・・」

少しの間、目が合ったまま沈黙の時が流れた。

俺は彼女が何を考えているのかを考えていた。

彼女の少し酔いが回ってトローンとした目。

彼女の少し赤くなった頬。

彼女の髪の毛。

彼女のまつげ。

彼女の少しだけ見えるかわいらしい八重歯。

見れば見るほどかわいく見えてしまった。

「えーと・・・」

「あ、ごめん！」

慌ててどけようとした俺の手を彼女がつかんだ。

「ど、どうしたんだよ」

「うーん・・・なんていうんだろ？」

「こんな体勢だったら襲っちまうぞ？」

「いいよ」

「え？」

「冗談で言っただつたのに・・・」

「冗談はよせよ」

「別にいいんだけどなあ・・・」

「おいおい、何言ってるんだよ。なんだ？俺に気があるのか？」

「あるね」

彼女はニカーッと笑った。

「ホントにか！？」

思わず叫んでしまった。

「ホントだよ」

「えっ！え、えーと・・・」

とりあえず元の座ってた時の姿勢に戻った。

彼女も隣に座りなおした。

グラスに残っていたスクリュードライバーの残りを飲んでいた。

「ホントに？」

確認のためにもう一度聞き返した。

「ホントだよ」

落ち着いた声で彼女は言った。

「えーと・・・」

俺の頭の中はパニック状態だった。

とりあえずなんて言ったらいいのかわからない。

えーとえーと・・・

「お、俺も結構気にしてたんだ。お前のこと」

「え？なんて言ったの？」

「2回も言わすなよ！」

「フフフ。うれしいよ。ウチも好き」

「俺もお前が好きだ」

2人は後ろの仕切りの向こうで一緒に来たメンバーが騒いでいることなんて気にも留めなくて、キスをした。

） F i n ）



（後書き）

一応これでおしまいです。  
こんな恋ができれば嬉しいと思って書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6016b/>

---

仕切りの向こう

2010年10月14日22時20分発行